

天明八年、古川古松軒の見た駒ヶ岳と火山灰の発見

雁沢好博*

天明八年八月四日(1788年9月3日)、よく晴れ上がった朝であった。幕府巡見使の一員として松前、江差を巡った古川古松軒はこの日、戸切地を立ち亀田に向かっていった。有川(現在の北斗市清川口、有川大神宮付近)に差し掛かった頃、正面にいよいよ駒ヶ岳(内浦ガ岳)が見えてきた。おびただしく煙が立ち上っている。歩みを止め、しばし見入った。活発な噴煙は、駒ヶ岳まで三里余り離れているにも関わらず、わずかの距離に感じられた。案内者から活発な活動の様子を聞き知った古松軒は、次のように『東遊雑記』にしたためた。「・・・蝦夷地の内浦ガ岳という山、平生大いに燃ゆる山にして、夥しく煙立ち上ることなり。・・・行程三里余といえどもわずかに思わる処なり。」

全国を旅した古松軒には、駒ヶ岳の噴煙がこれまで見た各地の噴煙を上げる火山と比べても極めて活発であるように思われた。そこで、次のように筆を続けた。「予が見る所の肥後の阿蘇ガ嶽、豊後の鶴見ガ嶽、薩州の四まんガ嶽、信州の浅間ガ嶽、何れも燃ゆる山にして、平生煙を見ることなれども、今見る内浦嶽(ママ)にくらべ思うに、勢いこの内浦ガ嶽第一なり。」そして、急ぎ絵筆をとった。汐首岬から横津岳に連なる山並みを描き取り、剣が峰から立ち上る噴煙を揺らすように一気に描いた(写真1)。



写真 1 松前蝦夷地之図(部分)古川古松軒(1788年)函館市中央図書館蔵 左隅書きに「この山を蝦夷の内浦ガ嶽と称す。常に燃る。信州アサマ山のごとし。戸切地より五里と言うなり」と読める。

この紀行文は後の時代、当時の駒ヶ岳の様子を知る貴重な手掛かりとなった。加えて、噴煙を上げる駒ヶ岳絵図は、近い時代に噴火があったことも教えてくれた。おそらくその噴火は、『松前年曆捷徑』に「甲辰(天明)四 正月十九日夜半月浦山焼亡」と記された天明四年(1784年2月8日)の噴火であろう。古川古松軒は天明四年噴火から4年7カ月を経た駒ヶ岳の噴煙を見ていたのである。

18世紀当時、駒ヶ岳の活動はやや活発で、明和二年(1765年)にも先んじて噴火があったらしい。『蝦夷地土産』には「駒ヶ岳・・・明和二酉年ニ炎上セルヨシ古老伝説ニシテ・・・」と記述されている。

18世紀の2つの噴火はこれまで古文書のみで記録され、物的証拠である火山灰は未発見のままであった。ところが最近、私たちは大沼の野外調査で実際に存在することを知った。東大沼キャンプ場付近の2メートル程の崖においてである(写真2)。そこで、大噴火として知られる元禄七年(1694年)と安政三年(1856年)噴火火山灰に挟まれた厚い粘土層の中に、近接する薄い2層の火山灰を見出したのである。火山灰には輝石と言う駒ヶ岳火山灰によく見られる鉱物が含まれていた。1694年以降1856年の間で、比較的短い間に2回噴火したとなれば、明和二年と天明四年噴火と見てよいであろう。しかも、いずれの火山灰にも1cm程度の軽石が多数含まれるので、マグマが爆発した本格的な噴火である。野外に残された火山灰の物的な証拠は、『松前暦捷徑』や『蝦夷地土産』に残された記述が真実であったことを見事に示してくれた。

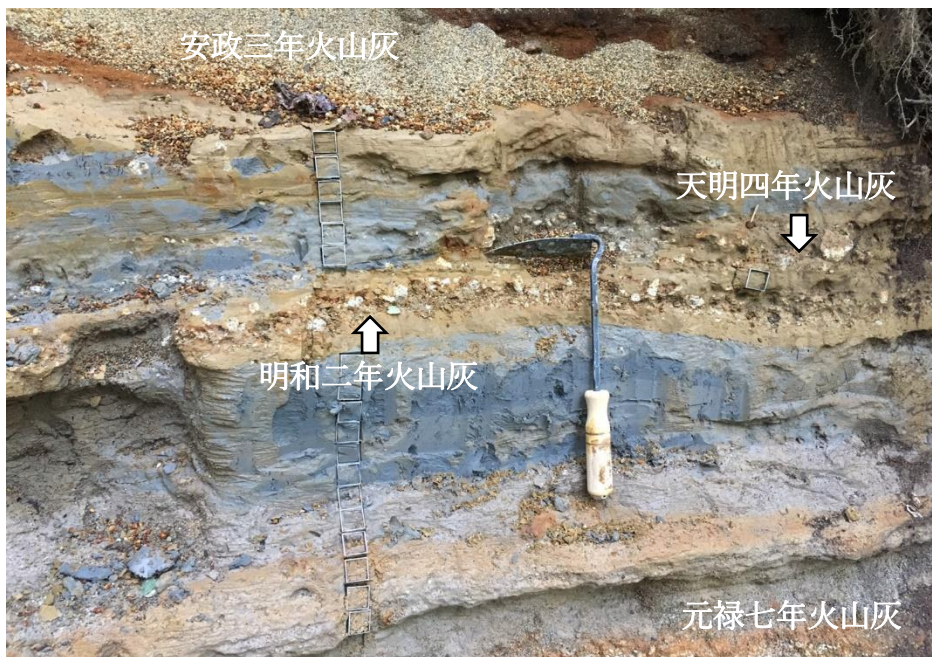


写真2 元禄七年火山灰と安政三年火山灰に挟まれた明和二年火山灰と天明四年火山灰

古川古松軒が『東遊雑記』を著してから約70年を経た安政三年(1856年)、駒ヶ岳は大噴火を起こした(写真2)。『蝦夷地土産』には、噴石に襲われる人々の姿、火砕流で沸騰する折戸川の状況が生々しく記述された。それからさらに76年後、昭和四年(1929年)の大噴火は初めて『写真』として記録された。それから90年を経て、駒ヶ岳の危険性をもう一度思い起こす時期に来ている。

注：『東遊雑記』は東洋文庫27(平凡社)1964年から引用した。

*石川県立大学(元北海道教育大学函館校)